

グローバリゼーションとディアスポラ

—なかま・つながり・〈ホーム〉をめぐる対話—

戸田三三冬・山脇千賀子

Globalization and Diaspora

—A free discussion on companionship, 〈sociabilité〉 and home—

Misato TODA and Chikako YAMAWAKI

Abstract

This is a trial of an interdisciplinary discussion by two scholars specializing different fields: History and International Relations vs. Sociology and International Communication. It would be interesting to see when we read a same book together and have a discussion based upon each stand point, sometimes different and often in common. The book we have chosen is: *Italy's Many Diasporas* by Donna R. Gabaccia. This paper is a part of our joint research in the academic year 1999–2000 on the Italian migration in South America.

プロローグ

本稿は、一種のディスカッション・ペーパーである。二人の異なったフィールドに立つ研究者が同一の本を読むとき、どのようにお互いの分析視覚が交錯するか。このペーパーを共同執筆する興味は、ここにある。

書物はドンナ・R・ガバッチャの「イタリアのたくさんのディアスポラたち」(Donna R. Gabaccia, *Italy's Many Diasporas*, London, 2000)である。

ともすれば、近代国家を形成したイタリアが、国の中に「南北問題」をかかえ、世界で有数の移民輸出国であった／国は貧乏で国民は苦勞した／『母をたずねて三千里』のマルコのように悲しい物語が秘められていた、というふうに描写されがちな国民国家における「移民」の話を、ガバッチャは、まったく別の新鮮な切り口：「グローバルであると同時に比較史研究のアプローチ」で語る。

彼女には2年前に出た面白い本がある：*We Are What We Eat* (Harvard UP, Cambridge Mass., London, 1998)。米国におけるエスニックな食物の普及と移民グループの分布、食品市場の形成などを、学術的な手順を踏みながら、誰でもが興味をもって読めるように、楽しくまとめている。イタリア語と英語で扉に献辞が書いてある。「食べながら思い出します：タミーノに。

ドイツ語を話す、イタリア人でポーランド人でアメリカ人のわたしの息子、エチオピア料理を食べ、キューバ料理をつくる、そしてこの本と一緒に成長したタミーノに献げます。」「だれも読まない本は書きたくない」と思った、ということだが、料理好きで美味しいものをみんな一緒に食べることが大好きな、イタリアの何処にでもいるお母さんの顔が浮かぶ。イタリア人が食べることを愛するのは、そこに仲間や家族との楽しいおしゃべりがつきものだからである。食べることは、そこに仲間がおり、「なかまの繋がり」があることなのである。

まさしく、この「なかまの繋がり」という目のつけどころが、この二冊の本『わたしたちはわたしたちが食べるもの』と『イタリアのたくさんのディアスポラたち』を、繋ぐものなのである。

第I部

(1) 「ディアスポラ」とは何か

今回の彼女の著作は、ロビン・コーエンが主宰するシリーズ：〈グローバル・ディアスポラス〉(Robin Cohen, Series Editor, Global diasporas)における5冊目の本である。コーエンが同名の本をシリーズに対するイントロダクションとして刊行しているので、まず彼の設定を一瞥しよう【Cohen 1997】。

「ディアスポラ」とは、コーエンによれば、古代ギリシアで「移住」と「植民」を意味した言葉であるという。とすれば、例えばイタリアのナポリは、もとギリシアの植民都市として始まっているから、初代のナポリ市民はギリシア人のディアスポラだったわけだ。

しかし、ユダヤ人、アフリカ人、パレスチナ人、アルメニア人にとって、この表現はもっと過酷な状態を意味する。かれらにとってディアスポラとは、「集団的なトラウマであり一つの懲罰」である。「故郷を夢見つつ追放されて生きている」のだから。また近頃、強い集団的アイデンティティをもちつつ外地に住むエスニック・グループが、自分たちを「ディアスポラ」とであると主張するなど、この言葉には実に多様な現象とさまざまな思いが託されている。

だが、「生地（あるいは想像上の生地）の外に居住するすべてのディアスポラ的なコミュニティは、『旧い国』がかれらの忠誠と感情を当然のこととして要求する、と認めている。」この要求は、強いことも弱いこともあるが、あるメンバーがディアスポラ的なコミュニティに帰属するかどうかは、「過去の移住の歴史と結びついた、逃れることのできない連鎖を受け入れるかどうか、また共通の背景をもった他の人々との同族意識があるかどうか」によってきまるといふ。

こうしてコーエンは、第1章「古典的なディアスポラとしてのユダヤ人の伝統」から出発する。第2章は「犠牲者ディアスポラ：アフリカ人とアルメニア人」、第3章「労働・帝国主義的ディアスポラ：インド人とイギリス人」、第4章「貿易ディアスポラ：中国人とレバノン人」、第5章「ディアスポラたちとその故郷：シーク教徒とシオニスト」、そして第6章「文化的ディアスポラ：カリブ海地域のケース」と、基本的には歴史的な視点からディアスポラの地理的なひろがりに光があてられる。第7章へくると一転して、「グローバリゼーションの時代におけるディアスポラ」。現在の世界経済と国際的な移住が扱われている。第8章は「結論：ディアスポラの諸類型とその未来」。全体として明敏な観察と抑制のきいた分析で、シリーズの入門としてまずバランスがとれ、主として1990年代以降の諸見解を手際よく紹介しつつ、議論に入りやすいよう考慮されている。近ごろの文化研究におけるダイナミックな「ハイブリッド（雑種）」・「ポスト・コロニアル」なディアスポラたちの出現も、コーエンの射程内にある。

背表紙の紹介・賛辞はまことにイギリスらしい。「アーノルド・トインビーは、彼の『歴史の研究』第1巻(1961)において、ディアスポラの未来の重要性を予見し、ローカルな国民国家よりむしろ世界的規模のディアスポラたちが、未来の波動であろうと述べた。コーエン教授は、トインビーのチャレンジしたグローバルな予言に、学者として初めて向き合い、重要で記念すべき書物を著わした。」(アリスター・ヘネシー、リヴァプール大学名誉教授。ラテンアメリカ研究所所属)

ここでは、筆者(戸田)の関心である「平和の方法としてのアナキズム」【戸田 1997】および国際学部担当科目の「異文化交流論」「国際学入門」「国際関係論」などで考えてきた「現代のグローバル化」の歴史的問題点も考慮しながら、それと交叉するコーエンの問題提起をとりあげ、ガバッチャのアプローチに繋げてみたい。

(2) ディアスポラについてのポストモダンの視点

『グローバル・ディアスポラス』第6章においてコーエンは、1994年におけるバーバの議論(Bhabha, H.K., "Frontlines /borderposts," A. Bammer(ed.), *Displacements: cultural identities in question*, Bloomington, Indiana University Press)をかいつままで紹介しつつ、ポストモダニストの多くが「現代世界の流動性」を捉えようとすると、伝統的な社会学や政治学のカテゴリーが余りにも硬直化している、と感ずることから学問的に出発している、と指摘する。バーバは次のように言うのだ。国語と国民国家の排他性にたいする信仰を捨てるばかりでなく、「主として概念的また組織的なカテゴリー」としての階級とジェンダーという独自性も放棄しなければならない。かわって、私たちは、ポストモダンの世界において、アイデンティティというブロックを構成する(人種、ジェンダー、世代、制度的立地、ジェオポリティカルな現場、そしてセクシュアルなオリエンテーションを含めて)「多重の主体的位置(multiple subject positions)」に敏感でなければならないと。同じ1994年にコーエンも、古い本質論はいまや冗長であり、むしろ「ジェンダー、年齢、無能力、人種、宗教、市民的地位や、音楽のスタイルやドレスのコードといったものさえも、組織とアイデンティティ化の非常に強力な軸となる」と示唆している【Cohen 1997:129】。

コーエンの紹介する1992年におけるホールの論点(Hall, S., "The question of cultural identity", S.Hall, D.Held & A.MacGrew(eds), *Modernity and its futures*, Cambridge: Polity Press in association with the Open University)も興味深い。ホールは、ハイブリッド(雑種/混血)性の発展とディアスポラの性格の変化の間には強い関連がある、とみなしているのである。彼によれば、近代後期は、2つの矛盾した大きな傾向に彩られている。「一方においてグローバル化の潮流は均質化と同化に向かう。他方において、多分グローバル化に対する反動であろうが、ローカリズムの再主張があり、エスニシティ、ナショナリズム、そして宗教的ファンダメンタリズムという形において注目されている。」こうした一見相容れない傾向のなかから、文化的アイデンティティが「変化しながら」現われてくる強力なケースがある。異なった伝統をひきずりつつ、同化や過去の喪失なしに、新旧の伝統を調和させているケースである。ホールはこのプロセスを「ハイブリッド文化」の進化と名づけ、この新しいタイプの文化と、植民地経験およびポストコロニアルな移住の確保によって創造された、「新しいディアスポラ」とを結びつけて考えている【ibid:131】。

第6章ではまた、「移動(travelling)文化、移動民族」と題して、移住に伴う文化的相互影響

についての文化人類学の論調、マリノフスキー、ギーアツ、レヴィ=ストロース、にふれつつ、最も意欲的・創造的な研究者群のなかから、ジェームズ・クリフォードを紹介している【Coben 1997 134-36】。クリフォードが基本的にチャレンジしているのは、文化人類学の、「非西洋人は、ネイティブなものでありローカルなものであるべきだ」、という伝統である。「場所を移すこと」「ノーマディズム」「巡礼」そして「移住」ではなく、彼は「旅する／移動する (travelling)」という言葉を選びとり、どのようなプロセスで諸文化が「旅する／移動する」のかに注意を集中している。何故なら「旅する／移動する」という言葉には、文化が相互に働きかけるという意味合いを含む、「両方向性」が托されているからである。コーエンによれば、クリフォードは1994年の論文「ディアスポラス」ではディアスポラの文化形態は、決して民族的ではない、と主張している。すなわち、国民国家は国民を集合し、エスニックなマイノリティを統合して、諸地方を一つの場所へと結び付けている。これと対照的に、ディアスポラスとは、多種多様の結び付きを意味する。たしかにあるディアスポラたちは、民族的要求を掲げているかもしれない。しかしながら「大部分の慣習的ディアスポラたちは、民族たることへの、あこがれと終末論の見方を、軍隊、警察力、国旗と国際連合の議席を伴う真の国民国家に変形することを、断じて前提条件としてはいない。ディアスポラたちは、国民国家と『旅する文化』の間のどこかに位置し、物理的意味では、国民国家の中に巻き込まれて居住するが、霊的あるいは精神的意味では、旅しており、その旅は、国民国家の時空の外におよぶものである。」(Clifford, J. 1992 "Travelling Cultures", L. Grossberg, et al (eds), *Cultural studies*, New York: Routledge; Clifford, J. 1994 "Diasporas", *Current Anthropolology* 9(3).) 【ibid:135-136】

クリフォードには次作 (*Routes*, Cambridge, MA: Harvard UP, 1997) があるが、同年に刊行されたコーエンの本書ではふれられていない。太田好信は『トランスポジションの思想』において冒頭クリフォードを援用しつつ次のように述べる。人類学の諸概念や人類学という制度が、あくまで「構築されたもの」(虚像) であると見抜き、「もう一つの別の可能性を同時に想像する」「歴史的想像力 (historical imagination)」が必要とされていると【太田 1998: 4】。彼とともに、クリフォードの提起する、「ハイブリッドな政治は状況的にならざるを得ない。それは理論から演繹することはできない。多くの場合、問題は『ナショナルリティ』あるいは『トランスナショナルリティ』という概念を、『真正さ』あるいは『ハイブリッド』という概念を誰が誰に対して行使しているか。そして自らの主張のヘゲモニーを保つために、どのような力を行使しているか、という一連の疑問」【同上: 24】に同意したい。太田は、周辺地域の研究者の可能性として、過去と未来を新たに結びつける「歴史的想像力」に基づいたカウンターナラティブを構想しようと試みている。

(3) 「グローバリゼーション」とは何か

コーエンは『グローバル・ディアスポラス』第7章において、社会科学においていまや強力なキーワードとなった「グローバリゼーション」について、1992年におけるマックグリュウの「グローバル社会が現われた」という提示 (McGrew, A. "A global society," S. Hall et al (eds), *Modernity and its futures*, Cambridge: Polity Press in association with the Open University) の安易さを批判し、表面的観察をいましめている。例えば、マックグリュウは、グローバル社会が現れたことを以下のような諸点を挙げて説明している。①人間は皆おなじようなニーズと熱望をもっているという啓蒙主義的主張が、多くの政治指導者や大部分の国の民主化運

動によって共有されている。②世界規模の金融・経済・技術・環境の相互依存。③惑星・地球はひとつという認識の普及。④ソ連の崩壊、「第三世界」という範疇の衰退を根拠にした世界はひとつ論の普及。⑤財、資本、知識、イメージ、コミュニケーション、犯罪、文化、環境汚染、ドラッグ、ファッション、信念が既に国境を超えて流通している。⑥以上の理由により、われわれは「最初のグローバル文明」を築く過程にあるという結論【Cohen 1997:155】。しかし、こうした議論に対してコーエンは、グローバル論者の間には深い対立があること、例えば、文化、ポストモダン、ボランティア的側面からグローバリゼーションを見ようという理論家たちと、資本主義世界経済の決定的支配を強調するウォラーステインのような、「最左翼の硬派の見方」が存在することを指摘する。さらに、国民国家の未来についても、それが崩壊の過程にあるとするラディカルな見解と、国民国家は機能を変えながら新しい圧力に適合しつつあるとする、より保守的な見解とに分かれている。また多くの論者がグローバリゼーションの出現について、余りにも非政治的である。彼等は「(グローバルな)市場の見えざる手」を暗黙のうちに認めており、強力なヘゲモニー獲得力が働いていることを無視しているという。ウォーターズが注意を喚起したように(Waters, M. *Globalization*. London: Routledge, 1996)、グローバリゼーションは、「移住、植民化と文化的模倣を通して、この惑星を横断したヨーロッパ文化の膨張の結果」であることを見落としてはならない。最後に、グローバリゼーションに対する反対の傾向が観察される。国民国家の未来がどうあれ、力とイデオロギーとしてのナショナリズムは増大しつつあり、また同様にエスニシティ、宗教的ファンダメンタリズム、レイシズム、セクシズムも、グローバリゼーションにもかかわらず、増大する傾向にあるように見えるのである【ibid:156-157】。

こう述べてコーエンは、ディアスポラ研究のために、グローバリゼーションについての5つの局面を提示する。(a)世界経済(b)インターナショナルな移住形態(c)「グローバル都市」の発展(d)コスモポリタンな文化とローカルな文化の創造(e)社会的アイデンティティの非領域化。それぞれの局面は、異なった方法でディアスポラの出現や繁栄に関わる。ここでは、最後の(e)に関してだけ触れよう。

コーエンは、パールマターの論文(Perlmutter, H.V. "On the rocky road to the first global Civilization", *Human Relations* 44(9), 1991)における指摘—世界は垂直的には民族国家と地域によって組織されているが、水平的には重なりあった、相互浸透的で多面的なシステム、つまり、場所のコミュニティではなく、興味、共通の意見や信念、好み、エスニシティと宗教、ライフスタイル、ファッション、音楽といったシステムによって組織されている、という指摘—を有効な出発点として、次のように展開している。けれど、おおまかに「近代」として知られる時期と、「グローバリゼーションの時代」との間には、決定的な相違がある。近代の特徴は、強力なヘゲモニーを発揮する国民国家のリーダーたちが、排他的な市民性を作ろうとしていた。世界はもはやそのようなものではない。国民国家を超えて外に開かれた多面的な連帯組織の範囲は、よりオープンに、より受容的に、ディアスポラ的な忠誠を許容してきている。カーンの言うように、どこかを起源とする安定した地点はもはやなく、終局の地点もなく、社会的アイデンティティと民族的アイデンティティの間に必要とされる暗合もない(cf. Khan, A. "Homeland, motherland: authenticity, legitimacy, and ideologies of place among Muslims in Trinidad", P. van der Veer (ed.) *Nation and migration: the politics of space in the South Asian Diaspora*. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press, 1995)。19世紀のナショナリストたちが望んだのは、おのおのの「人種」がそれぞれ一つの「場所」を持つことだった。

ところが彼らが得たものは、一連のコスモポリタン都市とサブナショナルでトランスナショナルなアイデンティティの増殖であった。これらは、国民国家の枠組みの中に容易には入り切れないものであると【ibid:173-175】。

彼の第7章むすびの部分でコーエンは、このリフレインに続けて、つぎのように言う。「新しいディアスポラたちのラッシュは、国民国家や伝統的宗教によって要求された忠誠の義務に対して、永続的、付加的あるいはオルタナティブな忠誠と帰属意識に焦点をあたえるものだろうか？それとも、巨大な破壊力をもつ神のような、国際化とグローバル化という、いっそう強い力に直面して、彼等ははしだいに消え去ってゆくのだろうか？」【ibid:196】。この疑問符はきわめて重い。

(4) ニュースレター《世界中のイタリア人労働者》(1993-)

ところで、おそらくガバッチャ自身、自分をそのなかに含めて考えている『イタリアのたくさんのディアスポラたち』は、書物の成り立ち自体、「なかまの繋がり」や「きずな」のなかで行われている。

1990年のニューオルリーonzにおける「アメリカ・イタリア歴史学会」で彼女は、「労働運動におけるイタリア人の世界移民」という発表を行い、新しい「なかま」に出会う。フラスター・オッタネッリ(姓からみて明らかにイタリア系)を初めとする彼らはみな、彼女のグローバル・比較史的アプローチ(global and comparative approach)を支持してくれた。これを皮切りに、アメリカ研究者のなかで、近代史と米国における生活を、彼女と同様の、グローバルな比較史研究という方法で描こうとする学際的なグループに出会う。ガバッチャは、彼女の話の聴いてくれる「なかま」を見つけたのである。こうした学的環境で書かれたのが、初めにあげた『わたしたちはわたしたちの食べるもの』であるらしい。

ニューオルリーonz会議の直後ガバッチャとオッタネッリは、「どこにでもいるイタリア人」プロジェクトを立ち上げる。93年から上述のニュース・レターを刊行し、発送先は、ついに15カ国・150人に達し、96年4月にはフロリダで会議を開くまでになる。『イタリアのたくさんのディアスポラたち』は、こうした通信を通じての世界中の協力関係の中から生まれたものであり、彼女の言う通り、ひとびとの大きな繋がりとその助力なしには、書かれ得なかったものであろう。刊行資料を送ってくれたり、文献を教えてくれたり、興味をもつ人々を仲間にいれたり、住所を交換したり……、イタリア、アルゼンチン、フランス、カナダ、米国に散らばっているイタリア移民とその子供たち【Gabaccia 2000:xii-xiii】。彼女が特別の感謝を捧げている一連の名前の背後には、それこそ「たくさん」の連帯と協力の関係がある。

気付いてみると、こうした連帯・協力関係は、なにも今に始まったことではなく、歴史的にイタリアのアナキズムやラディカリズムの労働運動・社会運動のなかでは、きわめて自然に行われてきた行動様式である。そればかりか、この「なかま」の作り方は、筆者が知る限り、イタリアの友人みなが、当り前にやっていることなのだ。大小のパーティを開くとき、旅行に行くとき、カルタで遊ぶとき、ちょっとした集まりを開くとき、二、三人のコア・グループがあれば、たちどころに20人位を集めることができる。一人ひとりが、またそれぞれの「なかま」を持っているからである(注1)。

ガバッチャとオッタネッリは、イタリアのラディカルな移民の生活について多角的な協同研究作業を行うなかで、彼らの主張である「われらにとって国境なんか無い」、にいたく共鳴してい

る。まさに「なかま」のいるところ、世界中どこでも「住めばみやこ (tutto il mondo è paese)」なのである。

そしてこれは、近々200年の西欧的な「近代国民国家」体系や世界的な政治的ヘゲモニーで組織された巨大資本のグローバリゼーションに、真っ向から対立する行動様式である。19世紀半ばに、理論としても運動としても確立した歴史アナキズムは、一人ひとりの「自由意思」に基づいた平等の協力の関係 (solidarietà) を、すべての社会関係の基礎とする。こうして出来たグループ相互関の関係も、各グループの自由意思に基づいた平等の関係なのである。この思想と運動が日本に伝わり、大正時代に正進会や信友会のような印刷工組合が生まれてくる中で、この社会関係を「自由連合」と呼ぶようになった。したがって、「自由連合」とは、アナキズムの内実である。プルードンの考えた「国際関係」とは、まさにこの「自由連合」の世界大の拡がりであって、決して国家間の関係ではない【戸田 1997】(注2)。

「インターナショナル」とは、イタリア語で internazionale であるが、そもそも語源的には、inter+natio であり、natio は、nascere(生まれる)に由来し、「生まれた処/生地」を意味する。従って、「インターナショナル」は、明治時代に「国際関係」と「国」の字を入れて訳されたけれども、この場合の「国」は「国民国家」ではなく、「くに=出生地=故郷」というふうに理解するほうが、本来の意味に近い。そうして、こう考えると、「インターナショナル」は、「グローバル」と違って、一人ひとりが根をもちつつ、連合するという意味を持つだろう。

(5) 歴史的なイタリア移民

そもそも地中海世界に突き出したイタリア半島の住民は、海洋の民である。ということは、移動が常態の民である。それは、あとで日本列島と呼ばれることになる島々の民も、ある時期までは、移動の民だったのと同じである【宮本 1980】(注3)。

ガバッチャによれば、1200-1790年のイタリア半島からのディアスポラは、学者、聖職者、探検者、航海者、歌手、音楽家、科学者、技術者など、総じてイタリア文明を伝えるエリート移民だった。しかも彼等は、自らを「イタリア人」と思っていたのではなく、ジェノヴァ人、ヴェネツィア人、ミラノ人、ナポリ人、ローマ人、フィレンツェ人等々であると思い、そう称していた。大切だったのは「パトリアとナティオ」(生まれ故郷)だった。「イタリア」という名称は、彼等の文化や文明にあこがれる、金持ちで教養ある外国人から与えられたものなのである【Gabaccia 2000:14-34】。

フランス革命後になると、イタリア近代国家を作ろうとするエリート・ディアスポラが亡命して「ディアスポラ・ナショナリズム」を育て、庶民をイタリア国家に結び付けようとする。だが1861年の国家統一時に、住民投票に参加したのは、人口のたった2パーセントだった。1871年には、ざっと2,700万の人口の内、500万人がヨーロッパや南米、アフリカなどの外地に、労働ディアスポラとして移民していた。こうしてイタリア移民は、1870-1914年、アルゼンチンや米国に解放奴隷にかわる不熟練労働力として、運河採掘、鉄道建設、トンネル建設、工場労働など世界経済を立ち上げる労働に従事したのだった。奇妙にも、集中的な国民国家形成期、国力とナショナリズムを集中化する時代に、ブルジョア世界経済は国境を無視していた。このグローバル経済のなかで、労働市場のみが真に世界的なものだったのである。可動資本は可動労働の親だった。つまり、労働ディアスポラは、グローバルな労働市場で仕事を見つけたのである【ibid:35-80】。

かくて、1870-1940年、パエーゼ(村や町)を単位としたプロレタリア・ディアスポラが、い

わばインターナショナル化した家計を支える。彼等の送金は、1861年における1300万里ラから、1880年には1億2700万里ラ、1890年以降は毎年2億5400万里ラ、1906年以降は毎年8億4600万里ラへと膨れ上がった。「移民はイタリア最大の企業となった」のである【ibid:92】。こうした男女のディアスポラたちはしかし、ナショナリズムや国家に対する忠誠心から送金を行ったのではない。それは、彼らの村や町（paese）のなかの顔が見える人間関係のなかで、家族が少しでもよい暮らしができるように、というささやかな願いから発するものだったのである。そして、この顔の見える縁故を頼って、移民も行われた。上述したような、イタリア人の社会関係の作り方が、ここでも十二分に発揮されたのである。

アナキストや社会主義者、反ファシストなどの政治的ディアスポラも例外ではなかった。彼等も、なかまを頼って顔の見える処に亡命したのである。紙幅がないので、筆者にとって最も興味深いこの部分は割愛せざるをえないが、例えば、エジプトのアレキサンドリアにはスエズ運河工事に従事したイタリア人が住みつき、イタリア語街区を形成していた。アナキストたちについて言えば、1870年代のマラテスタが最初の亡命先を選んだのはこのアレキサンドリアであったし、20世紀初めレーダ・ラファネリは、この街を訪れることによって、ムスリムともなりアナキストともなって、ミラノへ帰っている【Rafanelli 1975】。

ガバッチャの本に帰り、結びのページをみよう。「イタリアのプロレタリア・ディアスポラたちのイタリア文明は、驚くほどつましいものだ。いつもその賤しい、ときおり不名誉なルーツを意識しながらも、それでもなお彼等のイタリア文明は、イタリアのナショナリズムも含むすべての近代的ナショナリズムに対して、重要な選択肢を提供している。この文明は、いつもローカルな結びつき——そして、食べ物、家族、教会区、家庭といった、ひとびとがホームとよぶところ世界中のどこにおいても喜んで賞味できる毎日の楽しみ——から現われるのである」【Gabaccia 2000:191】。ガバッチャらしい素敵なるむすびである。古代地中海世界は母系制社会であり、いまでもマルタ島には巨大な遺跡が残るが、なんだかその息吹が伝わってくる。（執筆：戸田）

第II部

（1）なぜ「イタリア料理」について考えるのか

『イタリアのたくさんのディアスポラたち』には「グローバル・ディアスポラス・シリーズ」編者であるR・コーエンによる序文が寄せられている。これによると、ディアスポラは人々が散り散りになることを意味すると同時に、その人々が「ホーム(home)」と継続的なむすびつきをもつことを表現している、という【Gabaccia 2000:x】。この場合「ホーム」というのは文字通り「家」とだけ捉えるのではなく、比喩的にも理解されねばならない、とコーエンは続ける。「ホームとは心があるところ」であり、「頭があるところ」であり、「味蕾のあるところ」であるという【ibid:xi】。

コーエンが「ホーム」として「味蕾」を付け加えたのは、「イタリア料理」について考えることがイタリアン・ディアスポラスを考えるにあたっては欠かせないことだと判断しているからに違いない。また、ガバッチャ自身も「食」というわれわれの日常的な営みを見つめることを通して、「われわれとは一体なにものなのか」を考えようとした著作をもっている【Gabaccia 1998】。

『わたしたちはわたしたちの食べるもの—エスニック・フードとアメリカ人をつくること』と

題されたこの著作では、米国における「食」をめぐる歴史的経緯を追うことによって、米国の「食」が「アングロ・サクソンの伝統」に支配されているという「偏見」を解体することに成功している。米国（というよりアメリカ大陸）には先住民が築いた食文化の歴史があり、ヨーロッパから移り住んできた人々は、その食環境のなかで生活せざるをえなかった。そのこと自体が、既に「アングロ・サクソンの支配」という言説に隠されたアメリカ大陸の「雑種性」を暴露している。

『わたしたちは…』で米国の近代国民国家枠組みを内側から相対化してみせたガバッチャは、『イタリアの…』において「イタリア」という近代国民国家枠組みのあやうさを内側と外側から照らし出しているといえよう。「イタリア人」の人生／生活（vita）にみられるコスモポリタン性とローカル性の微妙な組み合わせを、過去500年にわたる移動（migration）の歴史のなかに炙り出す作業といったらよいだろうか。

ガバッチャは『イタリアの…』の「イントロダクション」で次のように書いている。「トランスナショナリズムとは二十世紀末やポストモダン世界につくられたわけではない。（私も含む）コスモポリタンな学者が望む国民国家体制のヘゲモニーに対する新たな脅威としてトランスナショナリズムを位置づけることもできない。イタリア移民の歴史において、トランスナショナリズムはすべての世界システムにおいて繰り返し現れる人生／生活の一次元ということができし、大昔からの起源をもつ『民族的風景（ethno-scape）』ということもできる」【Gabaccia 2000:11】。つまり、ガバッチャは、近代国民国家枠組みのなかで世界を眺める癖がついてしまった私たちの視野を、もっと長い歴史的スパンともっと自由な地理的スパンをもった「場」に連れ出そう、としているのではないだろうか。

こうした文脈に本書を位置づけるならば、ガバッチャが前著で「食」に視点を定めてアメリカにおける多文化性を分析した意味の広がりや、私たちは理解することになろう。私たちはまったく食わずに生き続けることはできないことを知っている。それは、歴史的にどの時点をとっても、地球上のどの場所にあったとしても、変わることはない。

筆者（山脇）は、本書の「イタリアン・ディアスポラス」に関する歴史的分析が、既述のガバッチャがやっているような目的を十分に果たしているかどうかを検証する機会を、他日に期す。本稿では、ガバッチャの前著と本書を横断している問題意識を共有しながら、そこから出現してくる（ガバッチャにとってというよりは）われわれにとっての課題が何かを考えてみたい。

とはいっても、われわれの面前には太平洋のように広がる課題群があり、そのすべてを扱うことはできない。筆者はこれまでペルーにおける中国系住民と日系住民の食文化について調査・研究をすすめてきている。ガバッチャとは具体的な分析対象は異なるものの、多くの分析視点を共有している。そこで、本稿では米国とペルーにおける「イタリア食」にみられるコスモポリタン性とローカル性の緊張関係について考えることによって、ディアスポラという視点からわれわれの前に広がる知的地平の一端を示す機会としたい。

（2）米国における「イタリア料理」の誕生

イタリア移民が南北アメリカ大陸へ怒濤のように押し寄せたのは、19世紀後半からの一世紀間にわたる。1876～1914年間に南北アメリカへ渡ったイタリア移民は、約772万人にもなる（南北の内訳は、南：約337万人、北：約435万人）【ibid:68】。この大量移民期ともいえる期間は、世界のあらゆる地域でナショナリズムが鼓舞された時期にあたる。こうした背景が世界の様々な

地域に独特の「イタリア料理」を形成していった。

米国における「イタリア料理」誕生の軌跡を米国の歴史家レヴィンスタイン (Harvey Levenstien) の論文によりながら概観してみよう【Levenstein 1985】。

そもそもイタリアが政治的統一を達成したのは1861年であり、19世紀から20世紀はじめにかけて「イタリア人」としての自覚をもった国民を「つくる」ための様々なこころみが、イタリア内外で実行された。料理にしても、細長い国土の多様性に富んだ環境に対応したそれぞれの郷土料理は存在しても、「イタリア料理」なるものは存在しない。

しかしながら、イタリア出身者は移民先ではすべて「イタリア人」として扱われ、彼らの食べるものは「イタリア料理」という範疇に入れられる。そのなかでもナポリを含むカンパーニャ地方およびシチリア地方というイタリア南部出身者が移民数比率からいって多数派であり、彼らの食文化が米国では「イタリア料理」の代表格として認識されるようになる【ibid: 3】。20世紀前半までの米国人が「イタリア料理」だと思っているのは、トマト、オリーブ油、ニンニク、タマネギ、チーズを材料としたイタリア南部料理の特徴をもった料理が大部分といってよいほどである。

現在ピザといえばアメリカ人やアメリカ文化を象徴するとさえいえるほど「イタリア料理」は米国に広く受け入れられたというイメージが強いが、「イタリア料理」は決して最初から米国で歓迎されたわけではない。第一次世界大戦をはさんで「イタリア料理」の米国におけるイメージは一転している。

1880年代から第一次世界大戦までの米国において、貧しいイタリア移民の食習慣は米国で発展した栄養学および家政学に則って「アメリカ化」されるべきものと位置づけられた。当時の「専門家」の主張は、今の私たちがもっている栄養学的知識からいえば「偏見」といってよいようにみえる。例えば、トマトに含まれる蔞酸は発ガン性があり、大量に摂取することは控えた方がよいという警告。イタリア人が相対的に高価な果物・野菜を好み、ほとんど水分からなるこれらの食物に貧しい家計から多くの出費をすることは好ましい習慣ではないという忠告（まだ、ビタミンは発見されていなかったこともあるが）。

そして、イタリア流料理法への「偏見」。20世紀初頭のイタリア系住民の食習慣「改善」に従事したソーシャルワーカーたちの指導例のひとつは、「ひとつの洗練された料理よりも3つのシンプルな料理を」だった【ibid: 10】。肉類・豆類・野菜類を一つの鍋で煮込んだスープやシチューに対しては、米国生まれの労働者からも好意的ではないまなざしが注がれた。「豚のえさ」のようだというのが。また、ニンニクのようなスパイスを使用した料理は、感覚を過剰に刺激して神経システムに悪影響があると主張する専門家もいた。

これらの主張は、今のわたしたちの視点からすれば、アングロ・サクソンの食文化をもつ人々のきわめて自文化中心主義的な異文化に対する嫌悪感の表明のようにみえる。そして、イタリア系住民はこうした「アメリカ化」圧力に辛抱強く抵抗しつづけた。

そして、第一次世界大戦は、イタリア系住民の食習慣に対する評価をまったく反転してしまった。参戦した米国に貢献するためには、国民は肉を控える節約をすることが求められた。肉なしのディナー・メニューとしてスパゲッティやラビオリのようなパスタ料理やスープ・果物・野菜・チーズ・豆類を材料にしたイタリア料理を見直す動きが専門家の間で主流となっていたのである。戦前は高価と非難されたものが質素な料理として賞賛される矛盾については、専門家達はいっさい言及しなかった【ibid: 12】。

さらに1920年代以降、ビタミンの発見をはじめとした新たな栄養学的見地から、食事のパラエティとバランスが強調されるようになった。「イタリア料理」はこの点で申し分のない見習うべき料理となった。

1920年代以降、特に「イタリア料理」がアメリカ社会で普及していく背景にはもう二つの要因が考えられる。1つは、食品加工業の発展・洗練である。調理済みトマトソースの缶詰とスパゲッティという「ディナー・キット」が誰にでも簡単に入手できるようになった【Leverstein:16】。2つめは、20年代を通じて移民制限法が制定され新移民が入国しなくなり、米国生まれのイタリア系の人々が「イタリア料理」を支える世代になっていたことである【ibid 1985:17-8】。つまり、イタリアの特定の地域への愛着はそれほど重要なものではなく、「イタリア性」を米国という生活の場で共有できることが重要な世代の登場といえることができる。

こうした流れの中で、米国において評価の低い素材（例：たこ、いか等）を米国人に親しみやすい素材（例：チキン等）に置き換えたり、ニンニクをつかわないトマトソースのように本来使われていた素材を抜いたりすることによって「イタリア料理」が形成された。イタリアには存在しないミートボール・スパゲッティは、まさに「米国のイタリア料理」としかいいようのないものである。

イタリアの一地域ではぐくまれた食文化は、米国という食環境のなかで新たな「米国のイタリア料理」として生まれ変わった。例えばナポリというローカル性を飛び越えてニューヨークに渡ったことにより、ニューヨークというローカル性のなかでローカルなものにとらわれない「イタリア料理」ができた、ということになる。

そしてこの「イタリア料理」である「ナポリタン・スパゲッティ」や「ミートソース・スパゲッティ」は、米国の食品加工業を経由して第二次世界大戦後の日本に定着した。アル・デンテの Pasta を多くの日本人が好むようになったのは、90年代に入ってからといえる。それまでは、米国で普及したのと同じように「うどん」のようにくったりとやわらかいスパゲッティが主流で、学校給食にもこうした Pasta が使われている。こうしたスパゲッティは、日本では「イタリア料理」としてではなく、「洋食」として定着した。

この一連の流れは、スパゲッティが南イタリアのローカル性を脱しながら、新たなローカル性を身にまといながらコスモポリタン性を獲得してきたことを示している。

（3）ペルーにおける「イタリア料理」？

ここで、ペルーに眼を向けるなら、米国のようなドラマチックな「イタリア料理」形成の歴史がないことに愕然とする。そもそもペルーは、既述の大量移民時代にもわずかなイタリア移民しか入っていない国ではある。1870年代がペルーに最も多くのイタリア移民が在住していた時期と推計されているが、それでも約1万人にすぎなかった。その後は減少の一途をたどり1900年時点では約6千人になっている【Bonfiglio 1994:135】^(注4)。

しかし、19世紀以降のイタリア移民によって首都リマを中心としたペルー海岸部における食文化が大きな影響を受けたことは確かだ。ペルーで起こったのは、「イタリア料理」の形成ではなく、イタリア移民が持ち込んだ食文化をも吸収した「ペルー料理」の形成だったという方が実情に沿っている。そもそもペルーの食文化にはイタリア料理で使われる素材や調理法などに対する大きな違和感は存在しない。米国の場合とはちがって、イタリア料理はペルーにおいて比較的高い社会的ステイタスをもっていたといえよう。

その背景には、ペルー植民地時代における宗主国スペインの食文化とイタリアのそれとの類似性を挙げることができる。植民地の最高権力者である副王が、スペイン支配下にあったイタリア出身者の場合、出身地の職人や芸術家などを多数従えてペルーに赴任したともいわれている【Bonfiglio 1995:43】。欧州から持ち込まれる文化は、植民地だったペルーにおいては敬意と称讃を持って扱われる傾向があった。

また、米国のように行政関係者などによって栄養学的見地からの食習慣の見直しが迫られるということは、幸か不幸か、ペルーではごく最近まで住民のほとんどが経験したことがない。米国で非難されたような肉から豆・野菜まで何もかも煮込んだひと皿料理とは、まさしくペルーの宗主国スペインを代表する料理コシードであり、19世紀の「ペルー料理」を代表するプチェロである。さまざまな旨みが混ざって醸し出すおいしさを味わうことのできる「味藪」をペルーの人々ももっていた、といえるだろう。そして、その「味藪」はイタリア移民も「共有」していた。

また、「ペルー料理」を形成する「味藪」を「共有」していたのは、いわゆるラテン系の人々だけではなかった。19世紀後半を通じて形成されてきた「ペルー料理」に大きな影響を与えたもう一つの要素は、中国系移民がもちこんだ中華料理であった。

ペルーにおける中国系移民はイタリア移民と比較した場合、ずっと規模が大きい。1849～75年の25年間に約9～10万人の中国系移民がペルーの土を踏んだとされている。当時の首都リマの人口が10万人程度であったことを考えると、見た目ではっきりと他の住民と区別できる容姿をもった中国系移民がペルーに及ぼしたインパクトは大きかったと言わざるを得ない。

中国系住民はイタリア移民同様にそれまでペルーでは食べられていなかった新たな野菜をペルーに根付かせ、スパゲッティやラビオリに相当するような中華ソバやワンタンに代表される「パスタ料理」を導入したほか、中華料理独特の「炒める」という調理法をペルーの人々にもたらしした。現在販売されているペルー料理レシピ集のなかには、必ずといってよいほどチャーハン、野菜あんかけ焼きそば、ワンタンスープなどの料理が「チーファ(chifa)」という「ペルー料理」として掲載されている。^(注5) 中華料理もまた、ペルーの人々を魅了するだけの、肉類と様々な野菜を組み合わせて絶妙なおいしさを作り上げる独特の手法をもっていた。

こうした「ペルー料理」をめぐる経緯からみえてくるのは、「ペルー料理」を構成するのはペルーの人々の「味藪」によって「許可」された料理群だ、ということになる。近代国民国家の誇りの源泉となる「ペルー料理」を創造することとは、とりもなおさず、共通の「味藪」を形成することだった、といえるのではないだろうか。その「味藪」はペルーというローカル性に支えられつつも、世界各地からやってきた「味」を吸収しつつくしたコスモポリタンな「舌」なのだ。

しかし、「食」と人々のむすびつきを考える際重要なのは、共通の「味藪」をもっていることだけではない。われわれはイタリアやスペインといったラテン系文化における「食」が占める位置の「社会的重要性」に目を向ける必要がある。それは、中国系文化においても類似した傾向のようにみえる。つまり、食べ物を準備・調理・消費することによって生まれる様々な社会的規範とそこに付着している楽しみや喜びが、人々をゆるやかにでありながら固くむすびつけているということだ。「食」は人と人を結びつけるものであり、人の生活／人生を根底から支えているものであるという大前提が、これらの文化間において共有されている。そして、それこそが歴史的・地理的制約から自由なコスモポリタンを支える絆のひとつではないか、という筆者の発想はガバッチャのそれと大変接近したもののようだ。

(4) グローバリゼーションのなかの「食」

現代世界において、「イタリア料理」や「中華料理」は「フランス料理」と並んで、世界の三大料理といわれている。この料理における「世界的序列」が成立した背景には、近代国民国家体制が世界を覆い尽くす過程で、「文化の序列」をつける必要が生じたことを示している。ただし、「フランス料理」があくまでも「高級料理」としてのコスモポリタン性を保持しつづけているのに対して、「イタリア料理」と「中華料理」がもつコスモポリタン性には異なる意味合いを考えざるを得ない。

現代世界において「フランス料理」が「高級料理」であることの担保になっているのは、近代の強力なヘゲモニーをもった国家群における「フランス文化」の卓越性の公認だといえよう。その背景には、ヨーロッパにおける中世から近代にかけての宮廷文化の伝統があることを無視するわけにはいかない【ピット 1996】。いわば「ヨーロッパ世界」が「フランス料理」の背後にはある。

これに対して「中華料理」の背後には「非ヨーロッパ世界」がある。ヨーロッパとは異質でありながら、やはり卓抜した宮廷文化の伝統を背景にした「中華料理」。世界とは「ヨーロッパ世界」だけではないことを、世界にむけて主張する役目を「中華料理」は負っている、といったら言い過ぎだろうか。

とはいえ、「中華料理」がグローバルレベルでの認知を獲得した背景には、「中国人」のディアスポラを見逃すべきではない。世界のエリート層だけを相手にしたのではない「中華料理」の世界各地における存在感は、一般庶民のあいだで生活をともにした中国系移民によってもたらされている。この意味では、「イタリア料理」の普及もヨーロッパや南北アメリカを中心とした「西洋世界」においては、「イタリア人」のディアスポラと密接につながっている。

もちろん、私たちは今一度「世界の三大料理」といったとき、この「世界」がどこを指すのかについてもう一度考えてみる必要があるだろう。そして、マクドナルド・ハンバーガーとコカ・コーラがまさに現代世界の「コスモポリタン食」になって、いまやインスタント麺がその地位に追いつこうとしている状況を理解しようとするなら、まず、「世界の三大料理」についての理解を進めることが重要なヒントを与えてくれるのではないかと筆者は考えている。(執筆：山脇)

エピローグ

西欧政治体系における国民国家は、父系制である。フランス革命自体、人権宣言における「人」とは「男性市民」のことであった。オランブ・ドゥ・グージュが「女の人権宣言」を書かなければならなかったのは、まさにこのためであったが、彼女は断頭台の露となって消える【ブラン1995】。

19世紀中頃のフランス人男性市民にとって、たとえブルードンのようなひとにとってでさえも、妻子を養える経済力が「市民」として認められる前提である、と意識されていた。女性は市民ではないのである。これは、西欧がその模範とするギリシア市民社会にそっくりである。オイコスと呼ばれる「イエ」を代表する「市民」は男性であり、この男性は同時に自己費用で兵士にならねばならなかった。「イエ」の労働は奴隷によってなされ、家父長は「子供や妻を治める」ものとされていた【アリストテレス『政治学』第1巻】。

I. ウォーラーステインが「家計／世帯 (households)」を正面から取り上げて、資本主義世界経済理論の中軸に据えたのは、1970年代初めのフェミニストの問題提起：家庭内労働も生産労働

である、に触発されたものである、と自ら述懐している【Wallerstein & Smith 1992】。一つの世帯のなかで、まさに主人（父兄）が外に出て賃金収入を得、妻・母は主婦として「シャドウワーク」を行う、という形のなかで、前者は生産労働、後者は非生産労働、と位置付けられる。そして資本主義世界経済においては、前者の地位が次第にあがり、後者のそれは次第に下がる。男女差別はこうして制度化された【ウォーラーステイン 1997】。

資本主義世界経済が「長期の16世紀」（1450～1640年頃）に、大西洋を囲む地域に成立したが、中核はヨーロッパであり、その他の地域は周辺・半周辺であった。これは、現在、全地球上を覆うに至っている。こうしたウォーラーステインのテーゼに対して、1967年の『ラテンアメリカにおける資本主義と低開発』で華々しくデビューし、従属理論の論客として知られるアンドレ・グンダー・フランクが最新作『リオリエント：アジア時代のグローバル・エコノミー』において、ウォーラーステインですらヨーロッパ中心主義に過ぎるとして、「より人類中心的でグローバルなパラダイムをもって、ヨーロッパ中心的なパラダイムに立ち向かうことをめざす」と宣言した【フランク 2000】。

彼によれば、1400～1800年のあいだ、世界経済は圧倒的にアジアの影響下にあった。アジアとは、中国の明朝／清朝、オスマン・トルコ帝国、インドのムガル帝国、サファヴィー朝ペルシア帝国である。近代世界システムなるものがあったとすれば、それは、ヨーロッパではなくアジアのヘゲモニー下にあった。西洋はアジアという巨人の肩に登ったのだ。貧しいヨーロッパは、アメリカ大陸で彼らが見つけた金山・銀山から供給された貨幣を賭け金として、アジア経済というカジノに入ることができたのだ。最終的に大もうけができたのは、「アメリカの金や銀の、増減はあっても絶えることのない流れのおかげ」だった。フランクは「歴史記述上の結論」として「ヨーロッパ中心主義の王様は裸だ」として、「よりグローバルで、ホーリズム的で、世界的ないし全ユーラシア的な、パースペクティブを採用」することを強く主張する。そして彼の目は「西洋と東洋とが、そう遠くはなく、すでにぼんやりと予見できる未来に、再びそのグローバル経済および世界社会における地位を交換するということ」を見て取っているようである。

さて、そして、わたしたちのディアスポラたちの運命は？イギリス人のコーエンの整理した言説も、位相の違いを問われるだろう。だが、人間はどこにいても、食べないでは生きていけず、一人では生きていけない。ここへくると、マラテスタではないが、どんな「なかま」をつくり、どんな「食べ方」をするかが、わたしたちひとり、ひとりに、問われてくる。歴史を開き、人類の行く手を「リオリエント」するのは、わたしたちの毎日なのである。（執筆：戸田）

【注】

- （注1）こうしたなかま関係・社会関係を遠洋航海という企てに応用したのが商業都市ヴェネツィアの成功であった【マクニール 1982】。同様に、「ソシアビリティ」としてのアミチーツィア（友情）がイタリア・レジスタンスの組織原理として役だった【アーダ・ゴベッティ 1995】【二宮編 1995】。
- （注2）イタリアのフェデラリズム／アナキズムの関係については、さしあたり日本西洋史学会第42回大会シンポジウム「ヨーロッパ再考—過ぎ去ろうとしない『近代』」における筆者の発言を参照されたい【遅塚・近藤編 1993：149—52】。
- （注3）日本平和学会1992年度春季研究大会部会「アジア・太平洋地域の人類学的課題—人間・

エコロジー・平和一」(司会：戸田三三冬)では、古代ユーラシア大陸と太平洋地域のディアスポラたちの移動が中心的議題であった。参考までに以下、報告者と報告テーマを挙げておく。(1)「シベリア少数民族から」エウドキヤ・A・ガーエル(2)「アイヌの月と木の話」チュブチセコル(3)「太平洋の島嶼国から」ロニー・アレキサンダー(4)「ホピとコロンブスの500年祭」北沢方邦【日本平和学会 1992】。

そしてこの脈絡におけば、家島彦一はイスラム商業世界のひろがりを、「ディアスポラ(移動・拡散)」とネットワーク形成という魅力的な視角から捉えている【家島 1991】

(注4) 19世紀前半に独立を達成した多くのラテンアメリカ諸国における支配者層の間では、欧州から移民を誘致することによって「近代化」を進めたいという希望が共有されていた。同じ南米でも大西洋側に面しているうえ、欧州移民誘致に有利に働く広大な国土をもったアルゼンチン、ブラジルはペルーとは比較にならないほど多くのイタリア移民を受け入れた。具体的な数字を挙げるなら、1857～1928年間にアルゼンチンに入国したイタリア移民は約287万人にも上る【国本 1998：301】。本稿では、アルゼンチン・ブラジルの食文化形成にイタリア系移民がどのように関わっているのかを分析することはできないが、今後の比較研究が待たれる。

(注5) 「チーファ」とは、ペルーにおける中華料理店および中華料理をさす言葉として使用されているが、その他のスペイン語圏には存在しない「ペルー語」といえる。語源は中国系の人々が使っていた「吃飯(＝ごはんを食べるの意)」の発音にあるといわれている。ペルーにおける中華料理が現地社会のなかでどのような受容がされていったのかという点についての社会階層をからめた詳しい分析は、【山脇 1996】を参照いただきたい。

【参考文献】

- Bonfiglio, Giovanni 1994 *Los italianos en la sociedad peruana*(2da Edición), Saywa s.r.l. ediciones, Lima.
- 1995 “Los italianos en Lima”, Aldo Panfichi & Felipe Portocarreros (ed.) *Mundos interiores: Lima 1850–1950*, Universidad del Pacífico, Lima.
- Cohen, Robin 1997 *Global diasporas—An introduction*, UCL Press.
- Levenstein, Harvey 1985 “The American response to Italian food, 1880–1930”, *Food and Foodways*, Vol.1, pp.1–24.
- Rafanelli, Leda 1975 *Una donna e Mussolini*, con presentazione di Pier Carlo Masini, Milano, Feltrinelli.
- Wallerstein, Immanuel & Joan Smith 1992 *Households as an institution of world economy—Introduction to Creating and Transforming Households. The constraints of the world economy*, Cambridge UP.
- アリストテレス 1969『政治学』(山本光雄訳)『アリストテレス全集15』岩波書店。
- ウォーラーステイン, イマニュエル 1997『新版史的システムとしての資本主義』(川北稔訳)岩波書店。
- 太田好信 1998『トランスポジションの思想』世界思想社。

- 国本伊代 1998 「約束の大地ラテンアメリカとメノナイト」山田史郎・北村暁夫ほか著『移民』ミネルヴァ書房.
- ゴベッティ, アーダ／戸田三三冬＝監修・解説1995『パルチザン日記 1943-1945』(堤康德訳)平凡社.
- 遅塚忠躬・近藤和彦編 1993 『過ぎ去ろうとしない近代』山川出版社.
- 戸田三三冬 1997「平和の方法としてのアナキズム」太田一男編『国家を超える視角』法律文化社.
- フランク、アンドレ・グンダー 2000『リオリエント：アジア時代のグローバル・エコノミー』(山下範久訳)藤原書店.
- ブラン, オリヴィエ 1995『女の人権宣言』(辻村みよ子訳)岩波書店.
- Y.H.マクニール 1979年『ヴェネツィア—東西ヨーロッパのかなめ、1081～1797—』(清水廣一郎訳)岩波現代選書.
- 宮本常一 1994『日本文化の形成(上中下)』ちくま学芸文庫.
- 二宮宏之編 1995『結びあうかたち—ソシアビリテ論の射程』山川出版社.
- 日本平和学会 1992「日本平和学会ニューズレター」Vol.10, No.2.
- ビット, ジャン＝クロード 1996 『美食のフランス』(千石玲子訳)白水社.
- 家島彦一 1991『イスラム商業の成立と国際商業——国際商業ネットワークの変動を中心に』岩波書店.
- 山田史郎・北村暁夫ほか 1998『移民』ミネルヴァ書房(イタリアの移民についてはこの他に北村暁夫の一連の研究がある。)
- 山脇千賀子 1996 「文化の混血とエスニシティ—ベルーにおける中華料理に関する一考察」『年報社会学論集』第9号, pp.47-58.

【付記】

このペーパーは、昨年度の文教大学国際学部共同研究「南米におけるイタリア移民の研究」における成果の一部である。